

緒言

日本の都市部では、戦後の急激な人口の増加と集中に伴い画一的な集住空間が大量に整備されたことによって、地域社会が保有してきた自然や歴史・文化、コミュニティなどの特性が希薄化しており、地域社会の固有性に立脚した集住空間を再生する必要性が叫ばれている。

本研究では、居住者に共有される空間を媒介とした生活と自然との関わりを明らかにすることによって、これら総体から形成される地域固有の景観、すなわち‘コミュニティ・ランドスケープ’の形成方策を探った。

なお、本論は4章からなり、各章毎の要旨を以下に述べる。

第1章研究の背景および目的と方法

本章では、既往研究の整理を通じてコミュニティ・ランドスケープの基本的枠組みを明確化させるとともに本研究の位置づけと目的および研究方法を設定した。

居住者が共有する空間、すなわち‘共’空間とは、利用が規定される機能空間ではなく、居住者の多様な利用が重層する中で一定のゆるやかな作法に基づいて居住者が主体的に維持する空間と呼ぶことができる。本研究で扱うコミュニティ・ランドスケープとは、既往研究の整理を通じて‘共’空間での居住者の主体的な「生活」と人間の根源的な欲求としての「自然との接触」から形成され、これらが時間的に積層されることによって生み出される環境総体を視覚的に捉えたものであると基本的に理解できる。

このようなコミュニティ・ランドスケープは、画一化や無機質化、生活感の希薄化が進行する中で、地域の固有性に立脚した集住空間の再生への新たな視点として期待されている。しかしながら、様々な集住空間に含まれる‘共’空間に着目しながらそでの生活や自然との関わりを把握し、コミュニティ・ランドスケープの形成のあり方を体系的に論じた研究事例はほとんどない状況にある。

本研究では、まず時間的積層を持つ戦前長屋地区の調査を通してコミュニティ・ランドスケープの原型を明確化させるとともに発現させる仕組みを明らかにする。次いで近年整備され時間的積層のない震災復興住宅を対象にコミュニティ・ランドスケープの原型と発現の仕組みを対比させることによって、今後の‘共’空間を媒介としたコミュニティ・ランドスケープの形成方策を探ることを目的とした。

第2章戦前長屋地区におけるコミュニティ・ランドスケープの原型

明治後半から昭和初期にかけて整備され時間的な積層を持つ集住空間の代表として、自然発生型、耕地整理型、土地区画整理型の空間構造を持つ大阪市内の野田地区、梅南地区、阪南地区を抽出し‘共’空間のしくみを探った。次に、最も‘共’空間が発達していた野田地区において、路地園芸を中心とした景観と住民の生活史を把握することによって、‘共’空間における自然との接触および生活の相互の関わりを整理し、コミュニティ・ランドスケープを発現させる仕組みを探った。

自然発生的に形成された野田地区では、地区の骨格道路から通過道路、路地といった多段階の空間構造が存在し、特に路地が生活空間として強く認知されるとともに骨格道路も地区の祭事空間や挨拶圏域として認知されており、重層した‘共’空間が発達していること。一方、計画的に整備された梅南地区と阪南地区では、空間構造が単純であるために自宅が面する街区街路だけが強く認知されるというように、狭い領域の‘共’空間だけが発達し地区全体としての‘共’空間が未発達であることが明らかとなった。従って、同等の時間的な積層を持つにもかかわらず、空間構造の違いによって‘共’空間の発達に明確な差異があることを明らかにした。

重層した‘共’空間が発達した野田地区において路地園芸を中心とした景観を捉え、地区全体を認知させる骨格道路では、敷き際に整然と配置された鉢植え園芸が発達し、人工的な景観の中に路地園芸という自然が一部導入されていること。近隣を強く認知させる路地では、敷き際からあふれ出す鉢植え園芸に加え、コンテナによる高木植栽や壁面棚での立体植栽も発達し、生活密度に比例して緑量を増加させた多様で生活感のある自然が導入されていることが明らかとなった。従って、本地区では、重層する‘共’空間ごとに路地園芸を中心とする自然が導入され、多様で生活感のあるコミュニティ・ランドスケープが発現していることを明らかにした。生活史から‘共’空間の利用を捉え、骨格道路では過去において商業・生活・交通の利用が合一された生活のしくみが、車社会への進行に伴い「地区内外の通過交通を優先させながらも住民が‘共’空間の手入れをする」という作法が継承されており、整然とした自然の配置というコミュニティ・ランドスケープが維持されていること。一方、路地では「自らが属する‘共’空間を他の空間と区別し、その内部では同一空間に属する他者の生活のあふれ出しを生活形態にあわせて容認する」という作法が継続されており、ゆるやかな統一性の中で個々人の嗜好性が容認された多様性に富む自然の配置というコミュニティ・ランドスケープが持続されてきたことが明らかになった。

以上の解析結果から、コミュニティ・ランドスケープの発現には、地区レベルから近隣レベルに至る多段階の空間認知から発達する重層的な‘共’空間の存在が基盤となり、それぞれの‘共’空間において、生活の中で自然との接触を生み出す路地園芸という緑化活動、多様な鉢植え園芸に見られる‘共’空間の特性に合致した緑化形態、生活形態と符合し居住者に共有される作法といった仕組みが時間的に積層されることが必要不可欠であることを明らかにした。

第3章現在の震災復興住宅にみるコミュニティ・ランドスケープの形成の限界と可能性

平成7年の阪神・淡路大震災後に大量建設され画一的な空間構造を持つ阪神間の震災復興住宅を対象に、‘共’空間の発達の限界と可能性を探った。次に、緑化活動を中心に生活再編を試みている震災復興住宅(南芦屋浜団地)を対象に、入居前後の緑化活動を通じたコミュニティ形成とその波及プロセスを把握することによって、‘共’空間を媒介としたコミュニティ・ランドスケープの形成の限界と可能性を探った。

画一的な空間構造を持つ震災復興住宅全体では、日常の生活に最も近い住棟周りの空間において実用・観賞用の緑化活動の発生が一般的に確認されるとともに、日常の利用強度と視認強度が強い共用空間では観賞用の緑化活動が若干確認された。次に南芦屋浜団地を対象とした詳細調査からは、個人の嗜好性を強く反映した緑化活動の場として自宅ベランダが利用されているが、団地の中心部に共用の緑化空間として計画された‘だんだん畑’はコミュニティ形成の場として期待されていたにもかかわらず美観形成を目的とした空間としてだけ認知されていることが明らかとなった。従って、画一的な空間構造を持つ震災復興住宅では、各住戸の直近の空間に‘共’空間の発生の可能性が見出されるものの、これが団地内の近隣レベルに拡がるには時間的な積層が不可欠であるといった限界が確認された。また、利用強度および視認強度の強い共用空間では、美観形成をきっかけに‘共’空間が発達する可能性が見出されるものの、時間的な積層がない中で‘共’空間を顕在化させるには何らかの方策が必要であることが明らかとなった。

そこで、時間的な積層の欠落と‘共’空間の未発達を補完する方策として、南芦屋浜団地の入居前後の緑化活動を追跡調査した。その結果、震災前の自宅周りおよび震災後の仮設住宅で個人での緑化活動を行っていた居住者は、団地入居後も個人での緑化活動を継続する傾向が確認され、入居後のコミュニティ形成に若干寄与していること。一方、入居後新たに個人での緑化活動を行った居住者は、コミュニティ形成に寄与する段階には至っていないことが確認された。コミュニティ形成の場として計画された‘だんだん畑’での緑化活動を捉えると、入居前から実施された協働による緑化イベントへの参加者は、イベントを通じてコミュニティを形成し、このコミュニティを通じて入居後の緑化活動を継続し、強固なコミュニティ形成を図るという経路を辿っており、共用空間での協働による緑化活動はコミュニティ形成に強い効果を発揮することが確認された。従って、利用強度および視認強度の強い潜在的な‘共’空間に、協働による緑化活動という「自然と生活との関わり」の仕組みを導入することによって、コミュニティ・ランドスケープを早期に形成させる可能性があることが明らかとなった。次いでこの協働による緑化活動の入居後の経緯を捉えた。その結果、活動開始当初は計画者や支援者によって景観形成の方策やルールなどが提示されるという活動形態が、緑化活動を継続する中で居住者自らの意思で‘だんだん畑’の活用方策を検討・修正する形態に移行しており、「‘共’空間と生活との関わり」から形成される作法の萌芽が確認された。また、‘だんだん畑’での野菜の栽培や収穫、収穫物の団地居住者への配布といった良好な緑化活動は、「‘共’空間と自然との関わり」を表出する野菜栽培という緑化形態に支えられていたことも明らかになった。

以上の解析結果から、‘だんだん畑’といった潜在的な‘共’空間では、居住者の生活に根ざした「緑化活動」を導入し、野菜栽培という「緑化形態」によって緑化活動を活性化させ、居住者自らの意思決定の仕組みという「作法」を発達させることによって、‘共’空間を顕在化させるとともにコミュニティ・ランドスケープを萌芽させていたことが明らかとなり、時間的な積層のない画一的な空間構造のために‘共’空間が認知されにくい震災復興住宅においても早期にコミュニティ・ランドスケープを形成できることを明らかにした。

第4章 ‘共’空間を媒介としたコミュニティ・ランドスケープの形成方策

本章では、各章の解析結果を通じて、今後の‘共’空間を媒介としたコミュニティ・ランドスケープの形成方策について論究する。

時間的な積層を持つ戦前長屋地区では、路地から骨格道路に至る近隣レベルから地区レベルに符合した重層的な‘共’空間の存在と路地園芸という自然の導入、生活の継続性がコミュニティ・ランドスケープを形成する基本的枠組みであることが確認できた。また、長屋での生活形態を反映した路地園芸という緑化活動、‘共’空間の特性を反映した鉢植え園芸という緑化形態、生活の継続性によって育まれる作法によって、一定の統一感の中にも多様性を許容した地域の固有性を持つコミュニティ・ランドスケープが発現されることを明らかにし、コミュニティ・ランドスケープの形成には‘共’空間、自然、生活の3要素の存在とそれぞれの要素を結びつける緑化活動、緑化形態、作法といった仕組みが重要であることを明らかにした。

時間的な積層がなく‘共’空間が未発達な震災復興住宅では、各住戸の直近の空間と共有空間の中でも利用強度と視認強度の強い空間で‘共’空間が発達する可能性が見いだされた。次に‘共’空間を顕在化させ早期にコミュニティ・ランドスケープを発現させる方策を探った結果、団地中央に設けられ利用強度と視認強度の強い‘だんだん畑’において、居住者の協働による緑化活動を誘発させ、‘だんだん畑’という空間の特性を反映した野菜栽培という緑化形態を採用し、生活に根ざした緩やかなルールという作法を居住者自らが構築することによって、未完ではあるものの一定のコミュニティ・ランドスケープを早期に形成できることを明らかにした。

従って、地域の固有性に立脚した集住空間の再生が求められている中で、‘共’空間という空間基盤の整備と自然要素の導入、生活の継続性の担保を図り、それぞれの要素を結びつける緑化活動の誘発と空間に適合した緑化形態の採用、生活と適合した作法の構築によって、一定の統一感の中にも多様性を許容し地域の固有性を持ったコミュニティ・ランドスケープを形成できるものと考えられる。